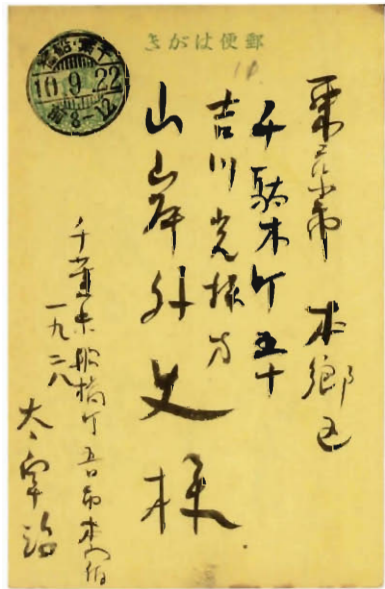


昭和10年（1935年）9月22日（消印）

ぼくのいまの言ふと、そのまゝに書いて
 おくれ。
 ぼくは客観的に冷静に書くことが出来る。
 （文を大十月）
 衣原も高見西氏には、
 村氏の面白く読める。このひらの作は
 には、思ひ成心がある。けれど、後の作は
 ゆつくりゆつくり讀んでみても、
 抜け（た）作である。自分から
 になことを言ふのは、はかばかしてゐる。
 後には、
 これだけ、
 歩もゆつたらぬ
 深衣（ふかぎ）
 ちかいうちに
 ちかいうちに



【校異】

(改行) 衣巻、〔全集〕 → (改行なし)

高見両氏〔全集〕 → 高見、両氏

コンデションが〔全集〕 → コンデションも

わるかつたらしい。〔全集〕 → わるかつたらしい

(改行なし) ちかいうちに〔全集〕 → (改行)

【ノート】

「ほかの作品」——「ダス・ゲマイネ」

文藝春秋十月号——第一回芥川賞の候補者である太宰治、衣巻省三、高見順、外村繁が、「文藝春秋」十月号に小説を発表した。同じ内容の葉書を、同日、神戸雄一にも送っている。山岸外史「太

ほかのいまの言葉をそのままに信じておくれ。
 ほかは客観的に冷静にさへ言ふことができる。

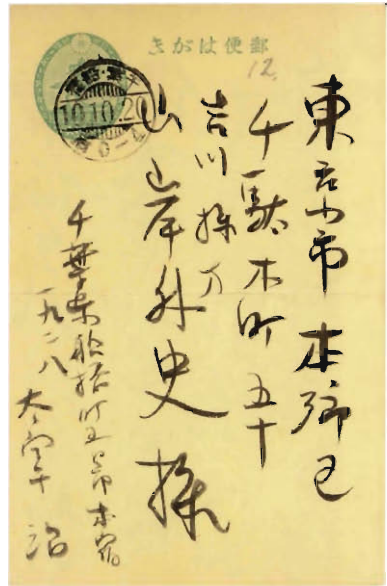
(文藝春秋十月号) 衣巻、高見、両氏には気の毒である。
 コンデションもわるかつたらしい。外村氏のは面白く読める。このひとの作品には量感がある。けれども僕の作品をゆつくりゆつくり読んでみたまへ。歴史的にさへずば抜けた作品である。自分からこんなことを言ふのは、生れてはじめてだ。僕はひとりで感激してゐる。これだけは一步もゆつらぬ。

深夜ひとり起き出て、たよりする。
 ちかいうちにあそびに来で。ぜひと。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川光様方 山岸外史様
 千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

宰治おぼえがき』にはこのはがきを引用し、「芥川賞の問題でよくよして、ばくと討論した日のあとで改めて、こんな意見をよせてきているのである」とある。なお、「虚構の春」の第四の書簡に「近頃、君は、妙に威張るやうになつたな。恥しいと思へよ。(一行あき。)いまさら他の連中なんかと比較しなさんな」とあり、このはがきへの山岸外史からの返信が使われたと、山内祥史は「解題」で推定している。ただし、「解題」にある「昭和十年九月二十日付」は「二十一日付」の誤り。

文士、うたをおくらねたら、
お返しするのが、
情と心得る。左に。
主日相の、
宇地、
裁



【校異】

(縦線二カ所なし)〔全集〕 ↓ (縦線二カ所あり)

文士、うたをおくられたら、お返しするのが、naturalな情と心得る。左に。

青桐の幹ごとうごく
宇地震哉

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

後片。

ふたが同じ句を。

あり

主目 桐

の 幹

ごと

うごく

宇

地

震

哉

ちんぷも、うらはぬ。

御病氣

くわいふくの由。

保養

かた

かた

こんど

の土

曜

にでも

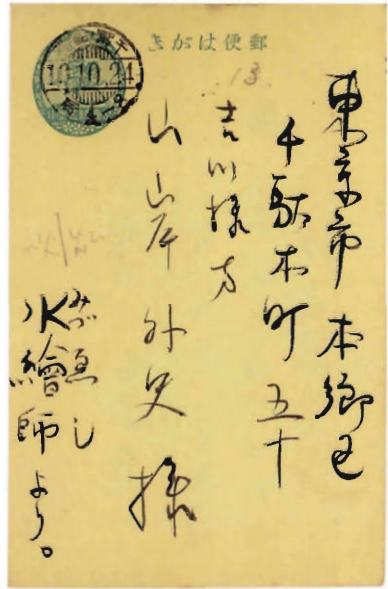
船橋

へおいで

さき

いきつ

と、よい結果が得られます。石一。



【校異】

謹啓〔全集〕 → 謹啓。
宇地震哉〔全集〕 → 宇地震哉。

謹啓。

ふたたび同じ句を。

「青桐の幹みきことうごく宇地震哉うなみかな」

なんにも言はぬ。

御病氣くわいふくの由。

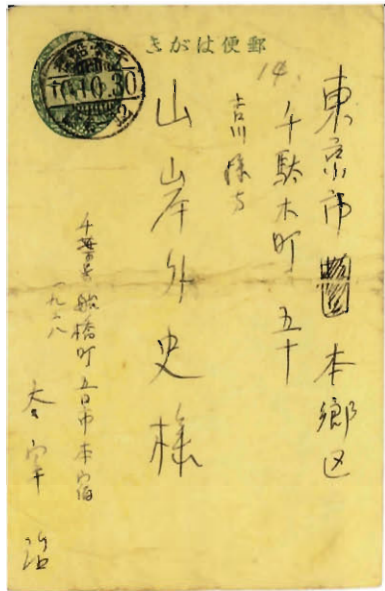
保養かたがた、こんどの土曜日にでも、船橋へおいでなさい。きつと、よい結果が得られます。

不一。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様
水絵師みづえしより。

昭和10年（1935年）10月30日〔消印〕

君は、こんな店を見たことがないか。出陣。若君が
 奥の向より、~~おの~~の金を見て、しつしつと出る。
 いままで、上座にすわつてゐた母者人は、
 下座にさがつて、初のお陣の若君を、まづまづと、
 上座に振える。若君、おつとりとすましてゐる。母
 者人、下座より、~~おの~~を見上げ、「ああ、お見ごと、
 お見ごと、あつぱれ」~~ご珠動~~をあらたなさい。
 （右の、秋景、玉糸直に微笑んで受け取れ。）
 かエルしエヌ、おの三度目（？）の詩集に、言葉あなま
 ロマンスと名づけた。
 病後、御供養のため、あいで下さい。後果の事



【校異】
 芝居〔全集〕→芝居
 「出陣」〔全集〕→「出陣」
 緋緞〔全集〕→緋緞
 （改行なし）いままで上座→（改行）
 据へる。〔全集〕→据える。
 （縦線三カ所なし）〔全集〕→（縦線三カ所あり）
 後略のまま。〔全集〕→後略のまま草々。

君は、こんな芝居を見たことがないか。「出陣。」若君が奥の間より緋緞の鎧を着て、しづしづと出る。いままで上座にすわつてゐた母者人は、下座にさがつて、初の出陣の若君を、まづまづと、上座に据える。若君、おつとりとすましてゐる。母者人、下座よりそれを見上げ、「おお、お見ごと、お見ごと、あつぱれご殊勲をお立てなされい。」

（右の情景、素直に微笑んで受け取れ。）

ヴェルレエヌ、その三度目（？）の詩集に、「言葉なき口マンス。」と名づけた。

病後御保養のため、おいで下さい。後略のまま草々。

東京市本郷区千駄木町五十 吉川様方 山岸外史様
 千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

昭和10年（1935年）11月11日〔消印〕

このごろ、ウレづつ（ほんとうにウレし）
けれど、深く、仕事をすすめて
居ります。

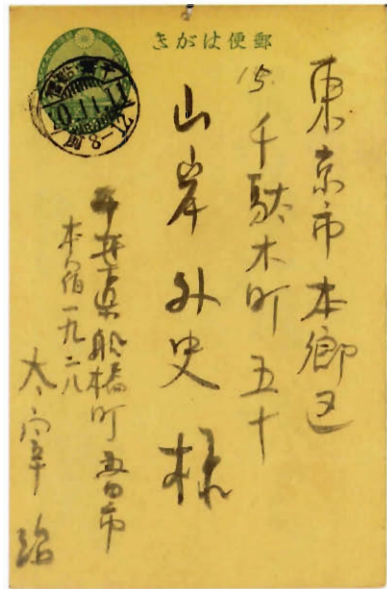
君の随筆論、本気に、讀みたし。
早くも君も、からだあつてのもの。

だね。

さきごろ、一句を得たり。

君がためバット一本の値打ちあらむ。

ソロモンの書^{ゆめ}字^{やぶ}破れたりトタン^{つば}堀。



【校異】

ほんたうに〔全集〕 → ほんとうに

（縦線二カ所なし）〔全集〕 → （縦線二カ所あり）

（改行なし）君がため → （改行）

バット〔全集〕 → バット

【フート】

山岸外史は『太宰治おぼえがき』で「たしかに、太宰の「ソロモンの王の夢」はこの頃、次第にやぶれていつて、（つまりブルジョア的な生理が次第に変革をおこしていったと解釈してもいいだろうが）ついに、トタン堀の「リアリズム」に接近してきたようにもみえるのである」と書いている。

このごろ、少しづつ（ほんとうに少し）けれども深く、仕事をすすめて居ります。

君の随筆論、本気に、読みたし。ほくも君も、からだあつての、ものだね也。

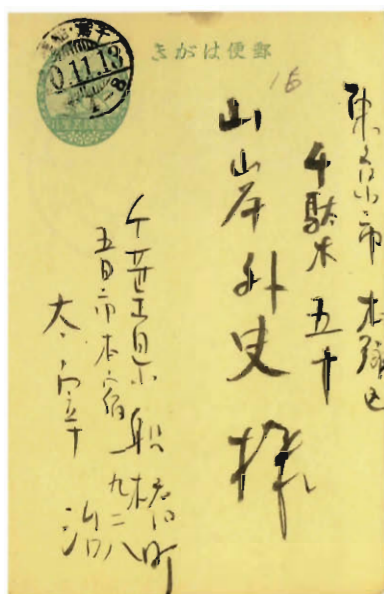
さきごろ、一句を得たり。

君がためバット一本の値打ちあらむ乎。

ソロモンの夢破れたりトタン堀。

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

神聖なる 赤土へ
みどり兒の
ひかり泣くや
冷月と我
みどり兒は、
赤土へ
あつた。



【校異】

みどり児は〔全集〕→みどり児は、

「神聖なる病氣」と題し、

みどり児の

ひいひい泣くや

冷月と我

みどり児は、捨て児なるべし。

東京市本郷区千駄木五十 山岸外史様

千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

書簡番号
17

昭和10年（1935年）12月20日〔消印〕



さかは便郵 17

12:20
8-12

山岸外史稿

東馬市本郷
千駄木町五十

CARTES POSTALES

十二

、館明亞桑温限河温州相)

王名 眼 托鉢
 こゝまで来た。
 君は、からす組
 三人の仲には、
 らず。君は、
 るや、すや、
 君は、
 力であつた。
 だ。

晴 堂 進 郎 ・ 野 上 ・ 取 東

【校異】

碧眼托鉢。〔全集〕 → 碧眼托鉢、
 (改行) ここまで来た。〔全集〕 → (改行なし)



碧眼托鉢、ここまで来た。

君は、「からす組三人」の中にはひらず。君は、すやすや
 眠つてゐた男であつた。君は幸福だよ。

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様
 太宰

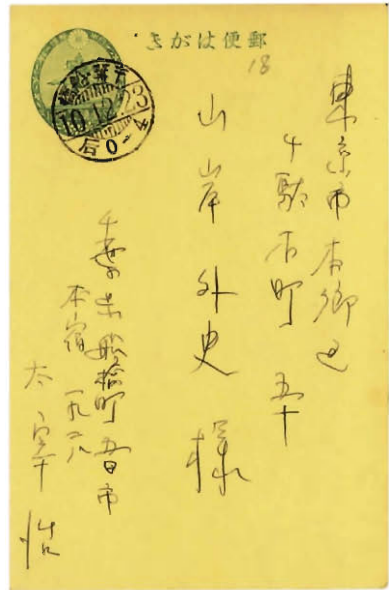
【フート】

ここまで来た。——絵はがきに「湯河原温泉 翠明館」とある。
 十二月十九日から二十二日まで、次姉トシの長男津島逸朗と湯河
 原、箱根に遊ぶ。

「からす組三人」——昭和十年九月二十六日に、山岸外史、檀一雄、
 小館善四郎と太宰が翠明館に泊まり、そのうちの三人が、夜中に
 旅館を抜け出して近所の娼家に上がった。その三人をいう。山岸
 外史『人間太宰治』によれば、太宰は眠っていて旅館に残ったが、
 今度再び翠明館に泊まったところ、残ったのは山岸だと宿の人に
 思われていたとのこと。

昭和10年（1935年）12月23日（消印）

ゆづる旅のらかへつた。年加の礼を缺く
 き見ん。7 由吉きます。そのために、
 さつと僕はお客へはひる。より重くも
 さししはて。月をも、僕より重くも
 いけ。刻に附し、牛にぶちこみ
 ます。し。ひ。上。は。ほんとうのこと
 のです。い。象。根。を
 雲。白。回。向。風。邪。の。味。で。下。山。
 板。に。痛。ん。で。あ。う。は。枯。野。を。馬。に。け。め。ぐ。る。し。に。み。た。



ゆうべ旅からかへつた。君のはがき見た。「書きます。そのために、きつと僕は牢へはひるだらう。さうして、君をも、僕より重い刑罰（ハレンチザイ）に附し、牢にぶちこみます。」以上は、ほんとうのことです。湯河原、箱根を漂口四日間、風邪の気味で下山。「旅に病んで夢は枯野を駆けめぐる。」五臓六腑にしみた。

（年賀の礼を欠く）

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様
千葉県船橋町五日市市本宿一九二八 太宰治

「この来信に対し、太宰治は、昭和十年十二月二十三日付または十二月二十七日付の葉書を、山岸外史宛に投じたと推定される」とある。

【校異】

牢（二カ所）〔全集〕 → 牢（二カ所）

以上は〔全集〕 → 以上は、

ほんたうの〔全集〕 → ほんたうの

ことなのです。〔全集〕 → ことなのです。

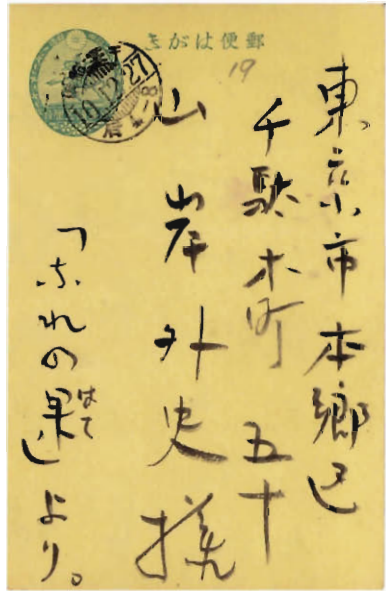
漂泊〔全集〕 → 漂泊

年賀の礼を欠く。〔全集〕 → 年賀の礼を欠く

【ノート】

「虚構の春」の第二十七の書簡に「めくら草紙だが、晦渋であるけれども、一つの頂点、傑作の相貌を具へてゐた」とあり、山内祥史「解題」によれば、これは山岸外史からの来簡を使ったもので、

山山亭君。
ありがとう。人の情を
知りました。あの、おハ
ガキでも、身にあま
る。よい初春を
迎へるやうに。さよなら。



山岸君。

ありがとうございます。人の情を知りました。あの、おハガキでも、身にあまる。よい初春を迎へるやうに。さよなら。

東京市本郷区千駄木町五十 山岸外史様
「なれの果^{はて}」より。

【校異】

山岸君〔全集〕 → 山岸君。

ありがたう。〔全集〕 → ありがとう。

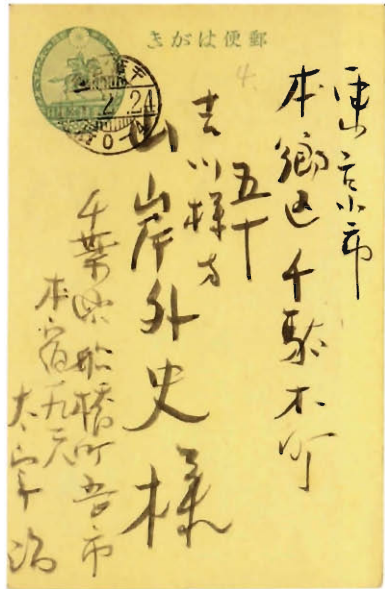
千葉県船橋町五日市本宿一九二八より〔全集〕 → 「なれの果^{はて}」より。

【フート】

書簡番号18（昭和10年12月23日）の「フート」参照。

昭和11年（1936年）2月24日〔消印〕

おひさし
梅崎氏へ半紙
むづかしいもの
（遊びに来ふいか？）
井伏さへは 君をほめ
てみた。 見直した由。
今更なる由。 演説を
立てるときの気がいつた由。



【校異】

(改行なし) 井伏さんは「全集」 → (改行)

【フート】

檜崎氏へ手紙出した。——「新潮」の編集者・檜崎勤宛二月二十四日付け書簡(『太宰治全集』による)。(謹啓／過日は、無理なおねがひをいたし、失礼申しました。幸ひ、先輩友人の、お力に依り、退院することができましたゆゑ、他事ながら、御安心下さい。／友人の山岸外史が、御誌へ評論を寄せたき旨、申して居りましたが、その節は、必ず、よろしく、お取りはからひ下さいますやう、私からもお願い申しあげます。／山岸のその評論は十回ほど書き直したる力篇と聞いて居り、友人一同、期待して居りま

只今檜崎氏へ手紙出した。むづかしいものだね。(遊びに來ないか?)

井伏さんは君をはめてゐた。見直した由。尊敬した由。演説を立てたのが氣にいつた由。

東京市本郷区千駄木町五十番地 吉川様方 山岸外史様
千葉県船橋町五日市本宿一九二八 太宰治

す。／山岸も今年は大いにやると決意して居るやうでございますゆゑ、何卒御助力ください。／寒さ、なかなか、やはらがず、病後の骨身に、こたへます。／大兄も、おからだを御大切に。／治
拜／檜崎勤様／二月二十四日